

## シャイフ・ファリード・バッカリーの アブル・ファズル伝について

近 藤 治

### はじめに

ムガル朝時代の人物について調べようとする、1780年に成ったシャー・ナワーズ・ハーンの『マアーシルル・ウマラー』（貴顕録）を参照する機会が多い<sup>1)</sup>。実はこれよりも1世紀以上前の17世紀半ばに、これとよく似た形式の書物が成立していた。シャイフ・ファリード・バッカリーの『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』（大官淵叢）である<sup>2)</sup>。この書は553人の高官たちの事蹟についての記述を収めており、『マアーシルル・ウマラー』のいわば雛形になった書物である。そのためであろう、両書の形式や内容には近似しているところが多い。目下私の関心のあるアブル・ファズルの事蹟について両書の記述を対照してみると、このことは正しく当てはまる。

実のところ『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』の英語版を手にして、はじめて私はこの書の存在に注目しだした。だが英語版の元となったペルシア語版を見る術がすぐにはなかったので、しばらく諦めかけていたところ大阪大学の山根聡准教授の厚意によって、同大学に客員教授として来学中のカラチ大学のモイーヌッディーン・アキール教授（Professor Moinuddin Aqeel）が自分の蔵書中よりペルシア語版の当該箇所をファックスで取り寄せ、私に見せて下さることとなった。2008年1月のことであった。

本稿では、このペルシア語版のなかのアブル・ファズルに関する記述を全文訳出して紹介することにする。英語版の翻訳を担当したインド考古局前長官ジャーウッディーン・デーサーイーの解説によると<sup>3)</sup>、『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』の現存する写本は3種確認されており、それぞれカラチのパキスタン史学研究会（Pakistan Historical Research Soci-

1) Shah Nawāz Khān, *Ma'āshir al-Umarā'*, ed. by A. Rahim and M. Ashraf Ali, 3 vols., Calcutta, 1888-1896; English tr., by H. Beveridge and B. Prashad, 3 vols., Calcutta, 1941-1964.

2) Shaikh Farid Bhakkari, *Zakhīrat al-Khawānīn*, ed. by Syed Moinul Haq, 3 vols., Karachi, 1961-1974; English tr., by Ziyauddin A. Desai, 2 vols., Delhi, 1993, New Delhi, 2003. Vol. II was completed on Desai's posthumous manuscripts by Tasneem Ahmed.

3) English tr., Vol. I, pp. xi-xli.

ety) とカラチの国立博物館, それにアリーガル大学マウラーナー・アーザード図書館とに所蔵されているという。モイースル・ハックのペルシア語テキストの校訂はパキスタン史学研究会所蔵写本を底本にし, 他の2写本と校合しながらなされたものであった。著者ファリード・バッカリーの生卒年ははっきりしないが, イングス川の渡河地点として有名なシンド地方のバッカルで生まれた。父親は同地の法官 (şadr) をつとめたことのあるシャイフ・マールーフ・バッカリー (Shaikh Ma'rūf Bhakkārī) である。ファリード・バッカリーはジャハーンギール時代のヒジュラ暦 1023 年 (1614/ 1615) に官位二十 (騎兵官位五) でムガル朝への仕官をはじめ, デカン地方の課税官 (amin) 時代には官位三百にまで昇ったが, 詳しいことは明らかにされていない。著書には別にシャージャハーン時代史を扱った *Ta'riḫ-i Shājahānī wa Tuḥfa-yi Sarāndāz Khānī* があったとされるが, これについても詳細は明らかでない。『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』が成ったのはヒジュラ暦 1061 年 (1651) とされる。

ファリード・バッカリーのアブル・ファズル伝はペルシア語版第1巻の67-77ページに収められている。この訳出に際しては, 英語版も適宜参照した<sup>4)</sup>。ペルシア語版は全文改行なしに校訂されているが, この訳文では文章の区切りのよいところで改行を数多く設けた。注記は訳文の理解に必要な範囲に止めた。また注記するまでも及ばない原語の表記や簡単な説明, 言い換えは本文中のパーレン ( ) 内に記し, 原文にない補足語はキッコー [ ] 内に記した。この訳文を発表するに当たり, ペルシア語版テキストの利用を可能にして下さった山根稔准教授とモイーストゥディーン・アキール教授に厚く御礼申し上げる。

#### シャイフ・アブル・ファズル・アッラーミー伝

シャイフ・ムバーラク (Shaikh Mubārak) の実の子息である。彼はあらゆる学問に甚だよく通じていた。彼は徳性の偉大さと天性の高貴さを体し, 彼の先天的並びに後天的に獲得された完璧さは比類の限度を越えている。世間は彼の存在を誇り (iftikhār)<sup>5)</sup> にしていた。彼は王中の王たる皇帝にとって模範的人物 (qidwa) であり, 帝国の支柱であるとともに国家の柱石であり, 天上的精神 (nafs-i qudsi) と地上的資質 (malakāt-i mulki) を有する人士であった。彼は首席代理人 (khalifa al-khulafā') と称された<sup>6)</sup>。彼には数多くの詩と散文とアラビア語の著名な著作類がある。彼は, 神の代理人 (khalifa-yi ilāhī)<sup>7)</sup> たる皇帝の諸事件と戦勝をペルシア語の散文で叙した『アクバル・ナーマ』なる書物を完成させ

4) *Ibid.*, pp. 48 - 55.

5) テキストでは iftikhār となっているが, iftikhār が正しい。

6) ここでは, 彼がアクバルの最高政治顧問に抜擢されたことをさしている。

7) テキストでは khalifa が khilafa となっているが, 明らかに誤植である。

たが、この書は修辞の模範 (kārñāma-yi ma'āni) であるということができる。他の著作、例えば『学問の試金石』(‘*Yār-i Dānish*) や『道徳論』(‘*Risāla-yi Akhlāq*)、『マハーバーラタ』(‘*Mahābhāratha*) のヒンディー語 (Hindī)<sup>8)</sup> からペルシア語への翻訳も著した。この人の書簡集 (‘*munsha’āt*) はインド (Hind) で有名で広く流布している。

彼の知識の獲得は父親から果たされた。当初彼らは生活の困窮状態が甚しかった。そのために、さる日シャイフ・ムバーラクは5人の息子たち全員を連れてマフドゥームル・ムルク (‘*Makhdūm al-Mulq*) と司法長官 (‘*ṣadr al-ṣudūr*) のシャイフ・アブドゥンナビー (‘*Shaikh ‘Abd al-Nabī*) のところへ行き、自らの生活の窮状を訴えた。彼は次のように懇願した。もし100 ビーガ [の土地]<sup>9)</sup> が恩賞地 (‘*madad-i ma’āsh*)<sup>10)</sup> として賜与されるならば、日々の糧 (‘*yaumiya*) に煩わされることなく専心して宗教学 (‘*ulūm-i dīnī*) の教授に従事します、と。シャイフ・ムバーラクがシーア派 (‘*mazhab-i imāmiya*) を奉じ、彼の息子たちも同様の咎 (‘*murtakib*) を負っているとの噂が届いており、またある者たちは彼らがマフディー集団 (‘*gurohī-yi Mahdawiya*)<sup>11)</sup> に入信していると言っていたので、スンナ派 (‘*ahl-i sunnat-jam’at*) の信仰に最高の確信 (‘*kamāl-i ta’aṣṣub*) を抱いていたマフドゥームル・ムルクとシャイフ・アブドゥンナビーは、シャイフ・ムバーラクと彼の息子たちを最も卑劣なやり方で衆会 (‘*majlis*) から追い出して、こう言った。「お前に生活の支援がなされれば、シーア派の蔓延 (‘*rawāj*) を引き起こすことになるう」。

[長男の] シャイフ・ファイジー (‘*Shaikh Faiḏī*) は自製の血管 (‘*īrq-i ḥimyat*) が沸き立ち (自制が効かなくなつて) 次のように言った。「私たちは名門のシャイフの出 (‘*shaikh-zāda-yi aṣīl*) であり、真正の宗教を奉じているからには、全ヒンドゥスターン (‘*Hindustān*) に知れわたるような仕返しをあなたがたに対して果たすことになるでしょう」。

偶然のことながら、さることにかこつけて数日後彼 (シャイフ・ファイジー) は皇子サリーム (‘*Shāhzāda Sulṭān Salīm* 後のジャハーンギール) の勉強部屋 (‘*maktab*) に入室し、皇帝アルシュ・アーシャーニー (‘*Arsh Āshiyānī* アクバルの諡号、以下ではアクバルと表記することにする) の御前で自らの美点 (‘*jauhar*) を御覧に入れた。そして機会えて、

8) もとのサンスクリット語が一旦ヒンディー語に直されて、それからのペルシア語訳が行なわれた。ここでいうヒンディー語はヒンドゥスターニー語の謂に近い。

9) 1 biga は約2.4反、約24アールであるので、100 ビーガの土地は約24町歩または約24ヘクタールの土地ということになる。ここでは biga の表記をしているが、bighā と表記されることが多い。

10) madad-i ma’āsh は宗教家や宗教施設、学者等に与えられる免税地。司法長官の推薦に基づいて皇帝名で賜与される。通例は永代保有が認められる。中国史上の寺田、学田に近い。

11) 北インドの町ジャンブルのサイイド・ムハンマド (‘*Saiyid Muḥammad* 1443-1505) が主唱したイスラーム教の新興宗教集団。彼はイスラーム教の再興者マフディー (‘*mahdī*) を自認して布教活動を行ない、信者たちはアフマダーバードを中心とするグジャラート地方に多かった。シャイフ・ムバーラクはこの地での長い逗留中にその影響を受けたとの嫌疑をかけられていた。

トゥーラーン (Tūrān 西トルキスタン地方) のウズベクの有力者 (wālī) アブドゥッラー・ハーン ('Abdullāh Khān<sup>12)</sup>) に返書を書くに際し、彼は自分の弟シャイフ・アブル・ファズル・アッラーミー (Shaikh Abu'l-Faḥr 'Allāmī) を推薦した。彼 (アブル・ファズル) の出廷が命ぜられた。彼は称賛と喝采を博すような返書を起草し、宮廷勤仕 (bandhā-yi dargāh) の仲間に加えられた。そして次第に皇帝アクバルの御前において近づきと寵愛を獲得した。

そうこうする間に、皇帝の誕生日がやってきた。皇帝のお召しの着物にサフラン (za'farān) が撒き散らされた。シャイフ・アブドゥンナビーは激昂し、宮中 (diwān) の〔面々の〕目の前で神の代理人たる皇帝に向かって杖を投げつけ、この御方の召し物<sup>13)</sup>の裾に当たってそれが破れた。彼はこう言った。「なぜ異端の人々 (ahl-i bid'at)<sup>14)</sup>の衣服を身につけ法定のもの (mashrū') を着ないのですか」。この当時皇帝アクバルはいつも所定の衣服 (libās-i masnūn) を身につけられており、善行 (amr-i ma'rūf) の普及と不法 (munkar) の禁止に精一ぱい努められていた。礼拝への呼びかけ (azān) さえも自ら行なって、導師の職 (imāmat) を支援されることがよくあった。それどころかモスクを掃き清められることさえなさっていた。それゆえこれら〔2人〕の人物 (シャイフ・アブドゥンナビーとマフドゥームル・ムルク) は皇帝に多大の難儀をかけていたのである。若い皇帝<sup>15)</sup>は、聖者ジンダ・フィール・アフマディ・ジャーム (Ḥaḥrat-i Zinda Fil Aḥmad-i Jām) の子孫である生母マリヤム・マカーニー皇太后の前に行き、「宮殿 (diwān)<sup>16)</sup>の面前で私は杖で打たれました。もし神の命ずるところを示そうというのであれば、人目につかぬところである人 (シャイフ・アブドゥンナビー) は諭されるべきでした<sup>17)</sup>」と訴えられた。

皇太后は次のように言われた。「我が子よ、この事件の発生がそなたの肩に重くのしかからないように。かのシャイフの意図したものは自分の偉大さを誇示することではなく、信仰の命ずるところ (aḥkām-i shar'i) の実践を行なったのです。至高の神は、古代人や現代人

12) 16世紀半ばからジャーニー・ベグ族の有力者として頭角を現わし、1557年からブハラを根拠地にして周辺に勢力を拡大、ムガル朝の気をもました。父の死後シャイバーン朝のハーン位 (1583-98) に即き、その最盛期の君主となった。

13) 原語は daulat (王国) または dawāt (インク壺)、あるいは dūlat (変化、幸運) のように読める。3番目の文字が alif か lām か不明だからである。ここでは英語版 (p. 50) の 'royal dress' に従っておいたが、当時これら3語のうちのいずれかにこのような含意の用法があったのであろうか。

14) ここではヒンドゥー教徒をさしているようだ。ヒンドゥー教の春祭であるホーリー祭ではサフランの色粉や色水をかけ合う無礼講が行なわれる。

15) テキストでは bādshāh chūn (皇帝はかくして) となっているが、校訂者の注記 (Text, p. 69, n. 1) によると別の写本では bādshāh-i jawān となっているということなので、それに従った。

16) この場合は公謁殿 (diwān-i 'ām) を指しているようだ。

17) 「忠告、説論」を意味する naṣīhat がテキストでは naṣhiyat (ないしは naṣhit) と誤記されている。

たちが最後の審判の日に集まったとき、そなたをあの世の懲らしめから救われたのです。可愛そうなイスラーム学者 (mullā-yi maflūk シャイフ・アブドゥンナビーを指す) が皇帝に対して善行をこのように強制したという、今お話しされたことは復活の日まで生き続けることでしょう」。

神の代理人である皇帝は泰然とした山のようにあられたので、シャイフ・アブドゥンナビーにひとことも言われず、シャイフ・ファイジーとシャイフ・アブル・ファズルに今回の出来事について打ち明けられた。2人は次のように奏上した。「この人たちによってなされたこれらすべての屈辱は、どんな理由によるのでしょうか。学問 ('ilm) によるのであれば、それならば<sup>18)</sup>私共が有している学問をあの人たちは持ち合わせておりません。もし陛下が私共の鼓舞と支援を行なってくださるならば、学問の討論 (mubāḥaṣa-yi 'ilm) において彼らは優位に立つことはできません。まずはじめに、彼らがそのような無礼を働いたサフランのついた衣服に関しては、本日サフラン仕込みの食事を彼らに食べさせればよいでしょう。後になって私共の道理にかなった主張が明らかとなるでしょう」。

サフラン仕込みの食事を〔一緒に〕取ったあと、シャイフ・アブル・ファズルはシャイフたち (マフドゥームル・ムルクとシャイフ・アブドゥンナビー) にこう言った。「もしサフランがイスラーム法にかなったもの (ḥalāl) であるというのであれば、なぜ神の代理人である皇帝がサフランのついた衣服を着るのをあなた方は禁じたのか。またもしイスラーム法で禁じられたもの (ḥarām) であるのならば、あなた方は食事で〔サフランを〕なぜ食べたのか。サフランの効果は3日間続くというのに」と。シャイフ・アブドゥンナビーは杖でシャイフ・アブル・ファズルの頭を叩いた。それが彼らのその後の成り行きの原因となった。

毎日シャイフ・アブル・ファズルは彼らの言説のなかに含まれているイスラーム法上の問題点をかの皇帝陛下に伝えた。信仰問題 (mu'ammā-yi milla) は、2人のシャイフ (マフドゥームル・ムルクとシャイフ・アブドゥンナビー) に対して次のように質問するまでに至った。「四つの法学派 (mazḥab) はいずれも正統 (bar-ḥaq) である。シャーフィー学派ではゾウムシ (sūs) やトカゲ (sūs-mār) を食し、マリーキー学派ではネズミ (mūsh) やコウモリ (mūshak-i parrān) を食すことになっている。あなた方はハナフィー学派を奉じ、四法学派のいずれをも容認 (qabūl) しているのであるから、〔これらの動物を〕食してみなさい」。

彼らは「気分 (tabi'at) が受け入れないのだ」と返答した。シャイフ・アブル・ファズルは次のように応答した。「そういう場合は信仰 (dīn) と法学 (mazḥab) とが齟齬をきたし (az miyān bar-khāst), 〔信仰と法学との〕中心軸 (madār) が気分に従って〔回わって〕

18) 「それならば」と訳したペルシア語副詞 pas は、「それならばそれで」のニュアンスを伝える。ファイジーとアブル・ファズル兄弟の学問に対する強い自信の表白を導入する役割を果たす語である。

いるのである。預言者の伝承 (ḥadīṣ) に「清浄なものは受け入れ混濁したものは放っておけ (khiṣ mā ṣafā wa da' mā kadr) とあることを実践しなくてはならない。すなわち、善きことで気分が受け入れるものは何でも行ない、気分が厭わしいとするようなものでもそれを避けてはならない<sup>19)</sup>」。

シャラフィ・アフターブ (sharaf-i āftāb)<sup>20)</sup> の日にすべての大官たち (khawānīn) の集会があった際<sup>21)</sup>、鞍をつけたロバが一人の理髪師に引かれて特別席 (khāṣ) および一般席 ('am) に連れてこられ〔2人のシャイフたちに次のように伝えられ〕た。「もし騎乗して剃髪することが法にかなっている (masnūn)<sup>22)</sup> のならば、あなた方は他の人々があなた方に倣って行なうよう、それを実行しなさい<sup>23)</sup>」。シャイフ・アブドゥンナビーは答えた。「確かにそれは法にかなっている。しかしながらインドでは一般化していず (rawāj na-yāfta)<sup>24)</sup>、人々は〔それを〕不面目で恥ずべきものとしている」と。

シャイフ [アブル・ファズル] (以下では単にアブル・ファズルと表記) はこの件に関して [クルアーンの] 詩節 (āyat) と預言者のいくつかの伝承を引き合い (ishtihār)<sup>25)</sup> に出し、誰かが預言者の慣行を無視すれば、その者はこういう者となり、またああいう者となる [と述べた]。要するに [マフドゥームル・ムルクとシャイフ・アブドゥンナビーの2人は] 連日取り乱し (shefta-hā<sup>26)</sup>) を募らせ、最高会議 (majlis-i 'ālī) において彼らは論駁されていた。

ついに2人の親愛なる人物は、いずれもインドから追放 (ikhrāj)<sup>27)</sup> されることを余儀なくされた。マフドゥームル・ムルクはメッカへ赴く途中、グジャラート到着後に死亡した。一方シャイフ・アブドゥンナビーは神聖なカアバ神殿を巡回した後に帰還し、インドに到着の後 [自らの] 命を創造主 (jān-āfirīn) に預けた。

アクバル帝はインドの人々 (ahl-i Hind) と友好的に交流していた。そしてラージプート族 (qaum-i Rājput) に対して最も敬意を表し、最も好意をいただいていた。アブル・ファ

19) テキストでは「それを避けなくてはならない」(az ān mujtanab bāyad būd) となっているが、bāyad の前にあるべき否定辞 na が欠落していると思われる。そうでなければ前後一貫した文意とはならないからである。訳文は na を補って行なった。英語版 (p. 51) は na の欠落したテキストをそのまま訳しているため、文意が難渋している。

20) sharaf は頂点の意、従って「太陽 (āftāb) が頂点 (始点) に昇る日」の意となる。この日は太陽が黄道上の白羊宮に入る日で、春分の日。アクバル・ジャハーンギール時代の元旦。

21) これはムガル朝廷で催される新年祭の初日を祝う集会。

22) 預言者の慣行 (sunna) に合致すること。

23) この言葉を伝えた主体は明記されていないが、行文上アブル・ファズルであることは明らかである。

24) na-yāfta がテキストでは na-yāqta と誤記されている。

25) テキストでは ishtihād と誤記されている。

26) テキストは疑問符付きで ṣīqa-hā としているが、これでは意味が判然としない。

27) テキストは ikhraj となっている。

ズルは皇帝の権力の手綱 (‘inān-i ikhtiyār) を取ることができなくなった<sup>28)</sup>。そこで事柄は世の人々に明らかな事態へと立ち至った。

皇子サリームはアブル・ファズルのやり方 (hāl) に対して好意をいただいていた、といわれている。ある日彼はアブル・ファズルの家の内に入っていき、〔製作中の〕クラーンの各部 (ajzā’) および諸解釈 (tafāsir) 〔の写本〕とともに40人の筆耕を差し押さえ、皇帝の目の前に差し出した。皇帝は次のようにお述べになった。「余をインド人たち (Hunūd) の信仰に誘いながら、自分はイスラームの人々 (ahl-i Islām) の宗教に確固として止まっている」。アブル・ファズルの〔皇帝に対する〕親密さと立場とに動揺が生じ、彼はデカン (Dakan) に送られた。

この遠征中、彼はこれ以上は想像することができないほど慣例と規範によく則って事を運んだ。まず第一に、巨大テント (jihīl-rāwutī)<sup>29)</sup> にアブル・ファズル用の饗主の座 (masnad) を設け、〔そこで〕貴顕たち (umarā’) 全員に食事を振舞うため毎日千食に上る特別の振舞い食 (langarī ṭa’ām) を用意した。またほかに九尺天蓋 (nuh-gazī)<sup>30)</sup> を張り、そこで身分の低い者も高い者も、富んだ者も貧しい者も誰でも、1日中炊き出される豆粥 (khichrī)<sup>31)</sup> が食べられるように周知されていた。

そして自分自身は水とヘーマ (hema ミンチ肉入りスープ) 以外に、1日当たり22〔セールの〕小麦粉 (āṭā) の割当て (rātiba) の食事をとった<sup>32)</sup>。その際彼の息子のシャイフ・アブドゥル・ラフマーン (Shaikh ‘Abd al-Raḥmān) が父の背後で給仕役 (sufraḥī) をするのが常であった。調理場主任はイスラーム教徒であることになっていたが、彼は注意深く監察して〔アブル・ファズルが〕一口分取り上げて一度だけ口にし、再び手をつけなかった食物は翌日調理せず、二度手をつけた食物は翌日調理した。もし食物がうまく調理されて

28) この文章は、アブル・ファズルがアクバルの意を受けてそのもとを離れ、デカンに赴任することになったことを意味している。

29) jihīl はペルシア語の数詞 chihīl (40) の訛ったもの。rāwutī はヒンディー語の rā’oṭī (小型テント) を写したもの。「小型テント40個分」が原意で、巨大なテントを意味するものと思われる。英語版 (p. 52) もこのように解している。

30) インド尺に当たるガズ (gaz) は約72センチメートル。従って9ガズは約6.5メートル。差し渡しがこの程度の大きさの天蓋 (吹き流し型テント) を当時このように呼んだのであろう。

31) キチュリー (ヒンディー語では khichrī) は米とひき割り豆とを煮た豆粥。病人食ともなる。

32) テキストは bist u dū āṣār waznī rātiba ṭa’ām dāsht と読めるが、これでは意味が判然としない。元の文章は恐らく bist u dū āṭā-yi rozī rātiba ṭa’ām dāsht であったのではないかと推定されるので、訳文はこれをもとにして行なっている。数詞 bist (bist に同じ) u dū (22) の後に単位は記入されていないが、重量の基準単位セール (ser 約900グラム) が省略されていると考えるのが最も自然である。アーターは主食となるチャパティーの原料の小麦粉。ヒンディー語のアーターをアラビア文字で表記すると、āṣā と実に紛らわしくなる。アブル・ファズルが1日22セール (約20キログラム) の小麦粉の割当てを受けていたのは多いように思われるが、多数の使用人たちを抱えた遠征指揮官の糧食としては当然であろう。

いない場合は、彼自身はそのことを何も示さずに息子のアブドゥル・ラフマーンに食べさせてみて、息子が調理人たちをたしなめた。太陽が白羊宮 (ḥamal) に移る日 (春分の日)、すなわちなウ・ローズ (nau-roz 新年元旦) に、すべての作業部屋 (kārkhānājāt)<sup>33)</sup> は彼の点検を受けた。彼は在庫類 (maujūdāt) を記録して自分の身近かに保管し、帳簿類 (dafātir) は焼却した。そして年中着用していた自分の着古した衣類 (pārcha) は、そのうちズボン (pā'ijāma) とチャルタ (charta<sup>34)</sup>) とランゴータ (langoṭa<sup>35)</sup>) については彼の目前で焼却し、これら以外の残余の衣類すべては自分の使用人たち (naukarān) に分配するのが慣わしであった。

新扶持は新たな運<sup>36)</sup>。かくして彼が各郡 (parganāt) に送り込んだ徴税官 ('āmil) は、〔その勤務実績が〕善かろうと悪かろうと自分だけの考えによって更迭することはなく、徴税官に忠告したり訓戒したり指導したりするのが常であった。アブル・ファズルはよく口にした、「〔もし更迭しようものなら〕事情を知らずにどうしてあの者を昇進させたのであろうかと言って、人々は我々の浅知恵を非難することになろう」と。彼は暴言や悪態を口にすることはなかった。彼の〔所管の〕事務所では鞭打ち (kora)<sup>37)</sup> の励行や業務不履行 (ghair-ḥāziri)、課徴金 (furū'i)<sup>38)</sup> の付加的徴収が行なわれることはなかった。彼は次のような言葉をよく口にした。すなわち、低い嘆息 (āh-i sard) を漏らし、手で膝を叩いて「さて、何をなすべきか」と。

デカン地方では、彼はすべての者たちが満足し感謝するように振舞った。彼は夜な夜な秘かに各ダルウィーシュ (darwish 托鉢僧) の居所に向いて金貨の贈り物を手渡し、「アブル・ファズルの信仰 (imān) の安寧 (salāmati) のために祈禱せよ」と懇願した。

こうした最中に、神の代理人たる皇帝はアブル・ファズルに対して迅速に帰還して伺候するよう召喚した。

33) kārkhānājāt は kārkhāna (工房, 作業場) の複数形。ここではアブル・ファズルが使用していた作業部屋ないし仕事場をさしている。彼のそうした作業部屋のなかにはクルアーンやその解釈書の写本製作所もあったことが本文中に出ている。

34) 英語版が指摘するように (p. 53)、これはあるいは短ズボン (パンツ) をさしているのかもしれない。

35) ヒンディー語では langoṭā。一般にランゴート (langoṭ)。男子用のふんどし。

36) 原文は rizq-i nau rozī-yi nau。このような俚諺があったのではないかと考え、仮りにこのように訳してみた。役人が叙任の機会を得れば、それはその役人にとって新たな幸運の始まりである。それを持続できるかどうかは本人の心掛けにもよるが、同時に推薦者ないし任命者の責任も大きい。こういう意味でこのような俚諺があったのではないか。英語版ではこの部分に当たる訳語は省かれている。

37) kora はヒンディー語の koṛā を写したものだ。

38) Irfan Habib, *The Agrarian System of Mughal India 1556-1707*, 2nd revised edition, New Delhi, 1999, p. 284 & n. 5 では、farū'āt, farū'iyāt が課徴金であったことを紹介している。furū'i は farū'i と読んでも差し支えはないが、音便上は furū'i が適していると思われる。



皇子サリームはブンデーラ (Bundela) のラーラ・ビール・シングデーヴ (Lāla Bir Singdev)<sup>39)</sup> に、折りを見て殺すようにとアブル・ファズルの抹殺を任せていた。

たまたまラーラ・ビール・シングデーヴはブンデーラの騎兵と歩兵から成る多数の軍隊をデカンに派遣し、彼らはそこで僅かな月俸 (māhiyāna) でアブル・ファズルの指揮下に勤務した。〔そのため〕アブル・ファズルのもとにいた使用人たちおよび以前から採用されていた古参の歩兵たち自身を解雇して、〔代わって〕安く売り込まれたブンデーラ族を勤務させた<sup>40)</sup>。はてはアブル・ファズルの作業部屋と使用人たちは、彼らの管理 (ḥawāla) のもとに置かれるまでとなった。

アブル・ファズルがアントリー (Antri<sup>41)</sup>) の町に到着した日、ラーラ・ビール・シングデーヴは大軍を率いてアブル・ファズルを襲い、戦闘を仕掛けた。彼らはアブル・ファズルの作業部屋〔の品々〕および彼の使用人たちの所持品のすべてを、〔アブル・ファズルの〕使用人となっていたブンデーラ族の随伴野営員ともども、ラーラ・ビール・シングデーヴの方にすっかり取り上げてしまった。アブル・ファズルは男らしい正義と勇猛を尽くし、殉死 (shahādat) するに至った。

彼の頭部は切断されてイラーハーバード (アラーハーバード) に運ばれ<sup>42)</sup>、彼の胴体はアクバラールバード (アークラ) に運ばれて埋葬された。チャガタイ (Chaghatā'īya テキストでは Chaghīya) 至高家 (ムガル朝) の慣行と醇風によれば、もし皇子がこの世からあの世へ身まかれ<sup>43)</sup>、はっきりと皇帝に申し上げることなく<sup>44)</sup>、皇子の代理人 (wakil)<sup>45)</sup> が青いハンカチーフを手にして挨拶し皇帝に伝えることになっている。かくして皇子ムラード (Murād) と皇子ダーン・シャー (Dān Shāh すなわち Dāniyāl) の死去の際に、このこと (in ma'nā)<sup>46)</sup> が実行に移されたが、皇帝は皇子たちの死去によって悲嘆に暮れられる

39) ブンデーラはガンジス川の南、デカン地方の北縁に広がる地域に勢力を張っていたラージプート系部族。ビール・シングデーヴは、ムガル朝に臣従していたこの部族の指導者であった。

40) 「安く売り込まれた」以下の文章に対応する底本のテキスト原文は qaum-i Bundela-yi sahl al-bai'rā naukar. となっているが、naukar の後に kardand が欠落していること、ペルシア語版編者の指摘する通りである (p. 74, n. 2)。

41) アーグラ県バヤーン (Payāwān) 県所在の町。アーグラとブルハーンプルとを結ぶ幹線道路上のグワリアールの南方、程近いところに位置している。

42) 当時サリームは父帝アクバルに反抗してアラーハーバードに城を構え、そこに滞在していた。アブル・ファズルの頭部は彼の首実験をえるためそこに送られたのである。

43) このところテキストでは az 'ālam-i baqā' khirāmad 「あの世から身まかる」となっているが、もともとの原文は例えば az 'ālam-i duniyawi ba-'ālam-i baqā' khirāmad のような表現であったであろう。訂正して訳出した。

44) テキストでは ba-'arḡ-i bādshāh na mi-rasānand 「皇帝に申し上げることなく」のところか ……mi-sānand と誤記されている。

45) ムガル朝時代、皇子たちも高官たちも自分の代理人を宮廷に置いておくのが慣例となっていた。

46) 英語版による限りこのような読み方が適切であろうが、テキストでは imaghī のような読み方しかできそうにない。

ことはなかった。アブル・ファズルの殉死の事件が明らかになると、廷臣たちは謁見してはっきりと奏上することができなかった。アブル・ファズルの代理人は〔慣行と〕同じ方法で青色のハンカチーフを手にしながらかつて謁した。そののちに彼は本当の事情を奏上した。

神の影 (zill-i ilāhi) なる皇帝は、「皇子スルターン・サリームが皇帝位を狂欲 (dagh-dagha) していたのなら、余を殺してアブル・ファズルを生かしておくべきであった」と述べられた。そして次の即興詩 (badāhat)<sup>47)</sup> を詠まれた。

余がシャイフは限りなき望みを抱き余がもとに來たれり

余が足への口づけを欲しながら首も足もなく來たれり

今日、アブル・ファズルの子孫は6人の兄弟ともども誰一人いない<sup>48)</sup>。またアクバラールバードに建てられていた快適な邸宅は、イーティマードゥッ・ダウラ (I'timād al-Daula)<sup>49)</sup> 御高家の邸宅群の管理下に入っている。

不滅のあの世は神のまします世にしてこの国は神の知ろしめす国<sup>50)</sup>

ハーン・アーザム・ムハンマド・アジーズ・コーカルターシュ (Khān A'ẓam Muḥammad 'Aziz Kokaltāsh<sup>51)</sup>) がアブル・ファズルの死去の年代表示銘 (ta'rikh) を次のように詠んだ。

アッラーの預言者の驚異の剣、不信者 (bāghi)<sup>52)</sup> の項を刎ねり<sup>53)</sup>

アブル・ファズルは夢のなかでアジーズ・コーカルターシュに次のように語った。「私の死の年代表示銘は神の僕アブル・ファズル (banda Abu'l-Faẓl)<sup>54)</sup> であって、ヒジュラ暦1011年<sup>55)</sup>だ。どうして神の工房 (kārkhāna) 〔での出来事〕に取り乱しているのか。神の

47) テキストでは badāhata となって語末に hā の文字が付されている。これは衍字であろう。

48) この文章執筆当時、すなわち17世紀半ばのことが記されている。息子アブドゥル・ラフマーンは1613年に病死し、孫ビシュータン (Bishūtan) は1642年に死去していた。

49) ジャハーンギール時代の重臣。本名ギヤース・ベグ (Ghiyās Beg)。1622年没。アーサフ・ハーン、ヌール・ジャハーンの父、ムムダーズ・マハルの祖父。この文章が執筆されていた当時、彼の一家はシャージャハーンの外戚として依然権勢を誇っていたので、敬語が用いられている。

50) この半行詩の原文は baqā' baqā-yi khudāyast wa mulk mulk-i khudā.

51) アクバルと同年生まれの乳兄弟。父シャムスディーン・ムハンマド・ハーンはアクバル時代に宰相にまで昇り、息子の彼もアクバル、ジャハーンギール2代に重臣として仕えた。1624年没。

52) bāghi には探究者の意もあるが、一般に暴虐者、反逆者、不実者などの意で使用される。

53) アジーズ・コーカルターシュはどうしてこのような半行詩をアブル・ファズルの死去の年代表示銘として詠んだのであろうか。これについては、当時から謎に思う者があったようだ。bāghi を構成するアラビア文字4文字 bā, alif, ghain, yā の有する各数値の合計は 2 + 1 + 1000 + 10 = 1013。アブル・ファズルは首を刎ねられたので冒頭の bā の数値2を除くと、彼の死去の年、すなわちヒジュラ暦1011年(西暦1602年)となる。

54) この語句が表記されるアラビア文字のすべての数値を合計すると、2 + 50 + 4 + 5 + 1 + 2 + 6 + 1 + 30 + 80 + 800 + 30 = 1011 となって、ヒジュラ暦の死去年と一致する。

55) 「ヒジュラ暦1011年」が原文では sih hazār u yāzdah-i hijri となっているが、冒頭の sih は sana (年) の誤植である。

恵みは広大であり、誰も絶望 (nā-ummid) することはないのだ」。

次のような言い伝えがある。ある日、真の聖者にして神の宮殿の最愛の人であり、かつ王侯たちの宮廷の寵臣であられたシャー・アブル・マアラー・カーディリー師 (Miyān Shāh Abu'l-Ma'ālī Qādiri)<sup>56)</sup>、すなわち聖下シャー・ダーウド・ラーホーリー (Shāh Dāwud Lāhori) の門人にして子息に当られる御方が次のように語られた。「私はアブル・ファズルのよこしまな行ないに反対であった。さる夜、私は次のような夢を見ている。世界の主宰者 (sarwar-i 'ālam 預言者ムハンマド) —— この方の上に祝福と平安がありますように —— が〔自分の統べる〕衆会に非常にうす汚い (aqbaḥ) 様子をしたアブル・ファズルを連れてこられて、このようにお述べになった。『この男は数日の生命の間 (一生の間の意) に厭うべき行ないを犯した。しかしながら神の恩寵には際限がない。〔彼の〕次のような祈禱のことば (munājāt) が彼の黒い行ない (悪業) からの救済の誘因となった。それは、彼の詠んだ次のような冒頭対句 (maṭla') である。“おお神よ、善良の人々に善業を嘉して栄光を与えたまえ。善しなき人々には御身の慈愛によって慰めを恵みたまえ”』と。世界の主宰者であるかの御方は、聖なる外套 (juba-yi mubārak 自分の着ていた外套のこと) をアブル・ファズルのマントの上に掛け、〔彼を〕衆会の席にお着かせになった」。

シャー・アブル・マアラー師の夢を虚言として処め立てすることはできない。また神の慈愛に驚くべきでもない。なぜならば、次のような預言者の確かな伝承があるからである。「ある者は全生涯を悪徳と醜行、飲酒と禁止行為 (manhiyāt) のうちに過ごし、そのために彼と地獄 (jahannam) との間には1ワジャブ (wajib 1 スパン即ち約23センチメートル) を残すだけとなる。しかし最後の段階になって彼は善行を行ない、その結果天国が約束されることになる。またある者は全生涯を断食と祈禱、メッカ巡礼と喜捨、禁欲と苦行で過ごす。そして最後の息のところで彼の〔厭うべき〕行ないが明らかとなり、その結果重荷 (地獄の苦しみ) に値することとなる」。

何人も自分の信仰を自慢してはならないし、何人も自分の忌まわしい行為のゆえに神の恩寵に絶望することがあってはならない。なぜならば〔どのように審判するのかの〕意思 (khwāst) は神の意思であって、何人にも神の意思に与ることはないからである。アッラーは自ら望むところを行ない、自ら求めるところを命じたまう。

## おわりに

以上がシャイフ・ファリード・バッカリーの『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』に収めら

56) この辺りのくぐりには *Ma'āṣir al-Umarā'*, Vol. II, p. 618 にほぼそのまま再録されている。その英語版によれば (Vol. I, p. 124, n. 2), 彼の生卒年はヒジュラ暦 960-1024 年 (1553-1615) で、アブル・ファズルとほぼ同時代のカーディリー派のスーフィー聖者であったと思われる。

れたアブル・ファズル伝の全文である。ここで、ホージャ・ニザームッディーン・アフマドの『タバカーティ・アクバリ』(アクバル階梯)に収められているアブル・ファズル伝を訳出して紹介しておこう<sup>57)</sup>。全文は次のごとく至極短いものである。

シャイフ・ムバーラクの実の子息である。彼はあらゆる学問に甚だよく精通している。彼は徳性の偉大さと天性の高貴さを体しており、また彼の先天的並びに後天的に獲得された完璧さは際限がない。今日、世間は彼を誇りにしている。彼は神の代理人たる皇帝の近侍者たちの模範的人物であり、帝国の支柱にして国家の柱石であり、また天上的精神と地上的資質を有する人士である。彼には著名な著作類がある。彼は、神の代理人たる皇帝の諸事件と戦勝をペルシア語の散文で叙した『アクバル・ナーマ』なる書を完成させたが、この書は修辞の模範であるといえる。他の著作、例えば『学問の試金石』や『道徳論』、その他がある。

著者のニザームッディーン・アフマドはアブル・ファズルと同時代人であり、この書の成ったのが1594年ごろであるので、動詞はすべて現在形で書かれている。実はファリド・バッカリーのアブル・ファズル伝は、その書き出しの最初のパラグラフとしてこのニザームッディーン・アフマドのアブル・ファズル伝をほぼそのままの形で採録していた。採録に際して彼は動詞を過去形に変えたり、表現を僅かに変えてみたりはしているが、ほとんど逐語的に利用している<sup>58)</sup>。

ニザームッディーン・アフマドはムガル朝の宮廷勤めをしている間に、アブル・ファズル

57) Khwāja Niẓām al-Din Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī*, ed. by B. De and M. Hidayat Hosain, 3 vols., Calcutta, 1913–1935, Vol. II, p. 458; English tr., by B. De and B. Prashad, 3 vols., Calcutta, 1911–1940, Vol. II, pp. 685–686.

58) 煩を厭わず両書の文章を紹介しておこう。接続詞 (wa) や後置詞 (rā) の異同は別にして、両書に相違のあるところには下線を施しておいた。《*Ṭabaqāt-i Akbarī*, II, p. 458》: khalaf-i ṣadq-i Shaikh Mubārak ast. dar jamī'i 'ulūm mutabahḥir 'aẓīm dārad. wa maẓhar-i jalā'il-i akhlāq wa sharā'if-i auṣāf ast. wa kamālāt-i kasbī wa wahbī-yi ū az sarḥad u ḥaṣr birūn ast. imroz rozgār-rā ba-ū iftikhār ast. qidwa-yi muqarrabān-i ḥaẓrat-i khalifa-yi ilāhī, wa i'timād-i daulat rukn-i salṭanat wa ṣāḥib-i nafs-i qudsī wa malakāt-i mulkī ast. taṣnīfāt-i sharifa dārad, wa kitāb-i Akbar-nāma ki waqā'i' u futūḥāt-i ḥaẓrat-i khalifa-yi ilāhī-rā ba-'ibārat-i naṣr-i Fārsī ki kārnāma-yi ma'ānī tawānad būd bā tamām rasānīda. digar taṣnīfāt miṣl-i 'Iyār-i Dānish wa Risāla-yi Akhlāq wa-ghaira dārad. 《*Zakhīrat al-Khawānīn*, I, pp. 67–68》: khalaf-i ṣadq-i Shaikh Mubārak ast wa dar jamī'i 'ulūm bahra-yi 'aẓīm dāshī. wa maẓhar-i jalā'il-i akhlāq wa sharā'if-i auṣāf wa kamālāt-i kasbī wa wahbī-yi ū az ḥadd-i ḥaṣr birūn ast. rozgār-rā ba-wujūd-i ū iftikhār būd. qidwa-yi ḥaẓrat-i shāhanshāhī, wa i'timād-i daulat wa rukn-i salṭanat wa ṣāḥib-i nafs-i qudsī wa malakāt-i mulkī būd. khalifa al-khulafā' khīṭāb yāfta, wa taṣnīfāt-i sharifa az naẓm u naṣr u 'arabī-yi bisyār dārad. kitāb-i Akbar-nāma ki waqā'i' u futūḥāt-i ḥaẓrat-i khalifa-yi ilāhī ba-'ibārat-i naṣr-i Fārsī ki kārnāma-yi ma'ānī tawānad guft bā tamām rasānīda, wa taṣnīfāt-i digar miṣl-i 'Iyār-i Dānish wa Risāla-yi Akhlāq wa tarjuma-yi Mahābhāratha az Hindī ba-Fārsī namūda, wa munsha'āt-i ishān dar Hind shāyi' wa muntashir ast.

とさまざまな交流があったはずである。彼の述べるアブル・ファズル論は贅辞で満ちており、皇帝近侍者たちの模範的人物であると最大級の贅辞を与えている。彼の『タバカーティ・アクバリ』の執筆時点で、『アクバル・ナーマ』が完成していたことを指摘しているのも興味深い。アブル・ファズルのこの大著はアクバルの同時代史であり年々増幅していく性格の書であるので、厳密に言えば「完成」はありえないのだが、ここではその大半がすでに書き了えられていたことを述べたものである。『アクバル・ナーマ』の第3巻に予定されていた『アクバル会典』が成ったのは1596年ごろと考えられるので、この書について触れられていないのは当然であるけれども、それが準備中であったことについてはニザームッディーン・アフマドも承知していたはずである。あるいは準備が進捗中の『アクバル会典』も含意する形で『アクバル・ナーマ』の「完成」が述べられていたのかもしれない。

ファリード・バッカリーがそのアブル・ファズル伝を用意する際に依拠した他の文献としては、『アクバル会典』の巻末に付されたアブル・ファズルの自叙を挙げることができる。例えば、彼の一家の生活の困窮や恩賞地の願い出と拒否、マフディー集団への入信の嫌疑、兄ファイジーに続く宮廷勤仕の許可、宗教界の大御所マフドゥームル・ムルクおよびシャイフ・アブドゥンナビーとの角逐と追い落とし、サフラン事件の顛末などの記述は、すべてこの自叙に拠ったものである。他にもバダーウニーの歴史書やジャハーンギールの回顧録等の利用が考えられるが、その詮索はここでは控えておきたい。

ファリード・ハーンはデカン地方の滞在が長かったので、その間に彼が入手した知識や情報がアブル・ファズルのデカン赴任中の記述でも生かされているようだ。その記述はアブル・ファズルに対して極めて好意的になされている。暗殺後数十年を経たころでも、彼を好意的に受け止める気風がこの地方になお強く残っていたからではないかと思われる。また彼は、ジャハーンギールに指嗾されたブンデーラのビール・シングデーウが暗殺の実行に先駆けて多数の配下をアブル・ファズルの身辺近くに浸透させていたことも明らかにしている。

アブル・ファズルの暗殺年に関してムハンマド・アジャーズ・コーカルターシュが詠んだ件の年代表示銘の紹介を境として、それまで好意的であった記述は一転して批判的なものに変わっていく。アブル・ファズル伝の最後のところに、彼が天国に赴く道が巧みに設定されているが、暗殺以後の記述は全体的に批判的な記述となっている。これは、この書が成ったシャージャハーン治世末期、すなわち暗殺後50年近くを閲した時点では、ムガル朝下の支配的思想界においてアブル・ファズルに対する批判的な見方が流布し定着していたことの一端を物語っているように思われる。

『タバカーティ・アクバリ』のアブル・ファズル伝を丸ごと採録した『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』のアブル・ファズル伝。今度はそれが『マアーシルル・ウマラー』のアブル・ファズル伝においてふんだんに採録されていくことになるが、これについては別の機会に紹介することにした。

## 参考文献

- Ma'āshir al-Umarā'* of Shāh Nawāz Khān, ed. by A. Rahim & M. Ashraf Ali, Vol. II, Calcutta, 1890.
- Ṭabaqāt-i Akbarī* of Khwāja Niẓām al-Dīn Aḥmad, ed. by B. De & M. Hidayat Hosain, Vol. II, Calcutta, 1927.
- Zakhirat al-Khawānīn* of Shaikh Farīd Bhakkari, ed. by Syed Moinul Haq, Vol. I, Karachi, 1961.
- Beveridge, H. & B. Prashad (trs.) (1941), *The Maāthir-ul-Uramā of Shāh Nawāz Khān*, 2nd edition, Vol. I, Calcutta, reprint, Patna, 1979.
- De, B. & B. Prashad (trs.) (1936), *The Ṭabaqāt-i-Akbarī*, Vol. II, Calcutta.
- Desai, Ziyauddin A. (tr.) (1993), *The Dhakhirat ul-Khawanin of Shaikh Farid Bhakkari*, Vol. I, Delhi.
- Habib, Irfan (1999), *The Agrarian System of Mughal India 1556-1707*, 2nd revised edition, New Delhi.
- 近藤 治 (2003) 『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会.

(佛教大学文学部)